

30分でパブコメ完成！



あなたの声を届けよう！

日本の気候・エネルギー政策の大転換へ

① 1.5°C目標と日本のGHG削減目標（地球温暖化対策計画案への意見）

地球温暖化対策計画

- 地球温暖化対策推進法に基づき策定される計画

温室効果ガスの排出抑制及び吸収の量に関する目標
事業者・国民等が講ずべき措置に関する基本的事項
目標達成のために国・地方公共団体が講ずべき施策等

Nationally Determined Contribution（国が決定する貢献＝削減目標）

- パリ協定に基づき、全ての国が5年毎に国連に提出しなければならない温室効果ガスの排出削減目標
- 次回提出期限は2025年2月 2035年目標

NDCの意味:

- 日本が、国際社会に対して、気候変動対策への貢献を示す重要な指標
- 世界第5位の排出国・日本が、先進国としての責任と能力を反映した目標とすることが重要

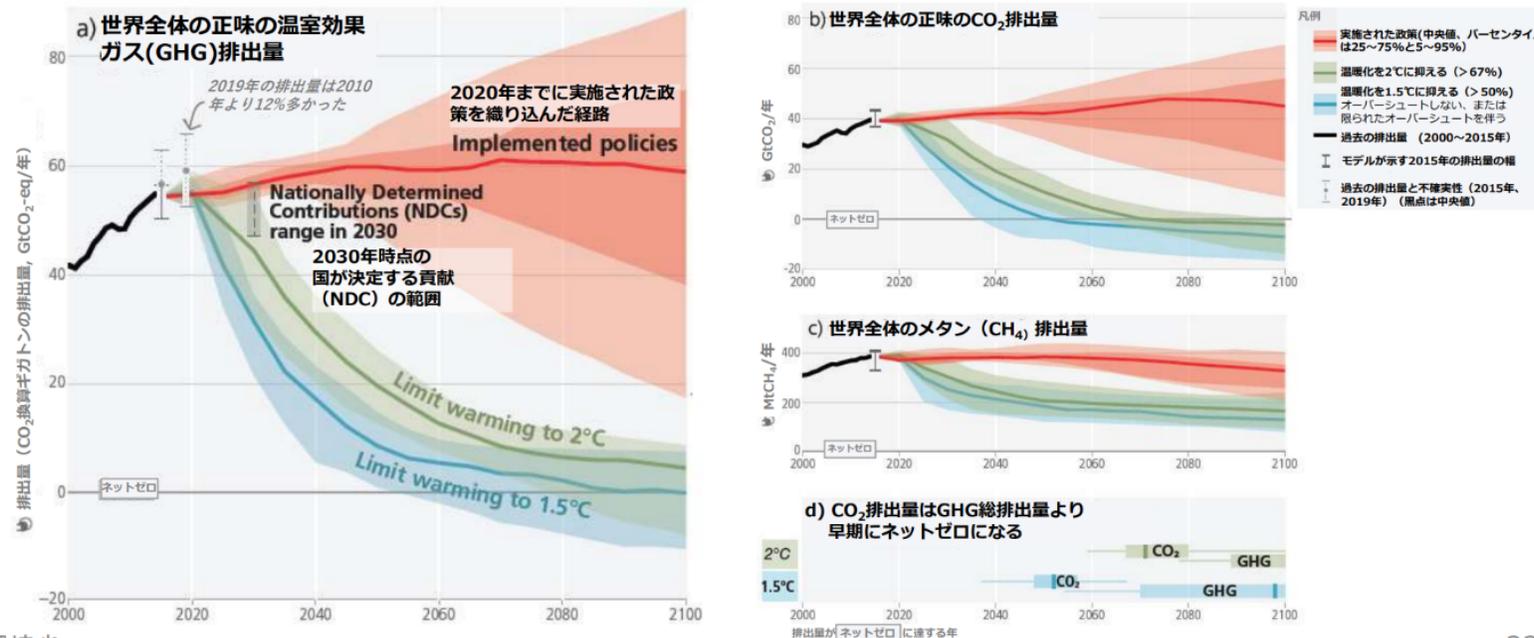
1.5°C目標との整合

■ オーバーシュートしない又は限られたオーバーシュートを伴って温暖化を1.5°C(>50%)に抑える全てのモデル化された世界全体の経路、そして温暖化を2°C(>67%)に抑える全てのモデル化された世界全体の経路は、この10年の間に全ての部門において急速かつ大幅な、そしてほとんどの場合即時のGHG排出量の削減を伴っている。世界全体でのCO₂排出量正味ゼロは、これらのカテゴリーの経路においてそれぞれ2050年代初頭及び2070年代初頭に達成される(確信度が高い)。(AR6 SYR SPM B.6)

＜IPCCが示す1.5°C排出経路＞

- ・オーバーシュートしない又は限られたオーバーシュート
- ・1.5°Cに抑える確率 50%
- ・この10年の間に急速かつ大幅な、即時のGHG排出量の削減
- ・世界全体でのCO₂排出量は2050年代初頭に排出量正味ゼロ

将来の温暖化水準に応じた世界の排出経路

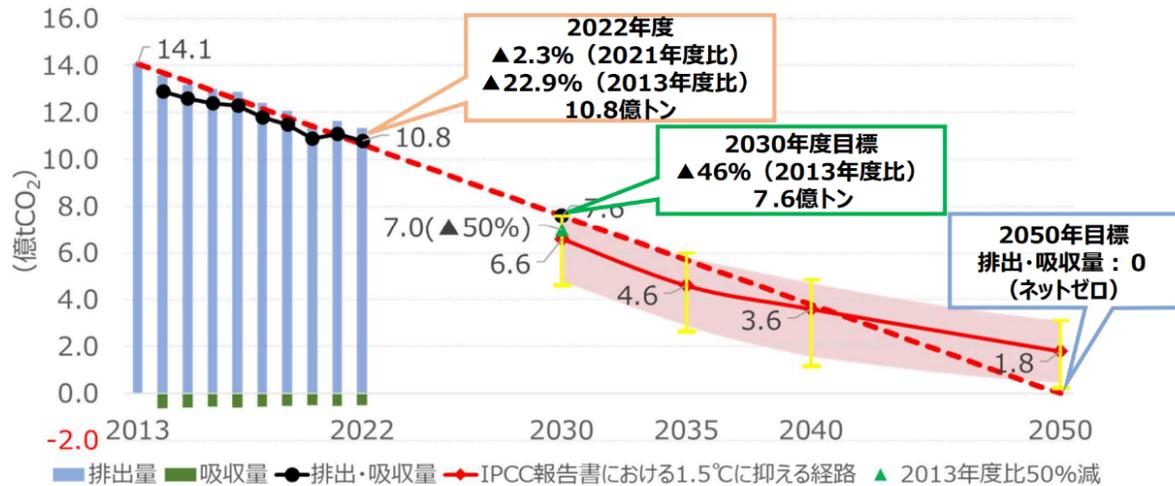


日本の排出経路は1.5°Cに整合しているのか？

2030年度目標及び2050年ネットゼロに対する進捗

第1回合同会合
資料4 (一部改変)

- 我が国の2022年度の温室効果ガス排出・吸収量は、前年度比2.3%減、2013年度比22.9%減。
- エネルギー多消費産業の生産減退も大きな減少要因となっており、**排出削減と経済成長の同時実現が鍵。**



○ 温暖化を1.5°C又は2°Cに抑える経路の世界全体の温室効果ガス (GHG) 及びCO₂削減量

	2019年の排出水準からの削減量 (%)				
	2030	2035	2040	2050	
オーバーシュートしない又は限られたオーバーシュートを伴って温暖化を1.5°C(>50%)に抑える	GHG	43 [34-60]	60 [49-77]	69 [58-90]	84 [73-98]
	CO ₂	48 [36-69]	65 [50-96]	80 [61-109]	99 [79-119]
温暖化を2°C(>67%)に抑える	GHG	21 [1-42]	35 [22-55]	46 [34-63]	64 [53-77]
	CO ₂	22 [1-44]	37 [21-59]	51 [36-70]	73 [55-90]

※1: 上の図の赤い帯の範囲は、2023年3月に公表されたIPCC第6次評価報告書統合報告書において示された1.5°Cに抑える経路における世界全体の温室効果ガス排出削減量(%)を仮想的に我が国に割り当てたもの。
 ※2: 当該報告書では、モデルの不確実性などを加味し、1.5°Cに抑える経路は幅を持って示されているため、2030年、2035年、2040年、2050年時点における排出量は黄色線と幅を持って示している。また、その代表値をつないだものを赤色の実線で示している。

<政府の説明>

- ・日本の削減経路はネットゼロに向けた削減目標にオントラック
- ・2030年目標はIPCCの1.5°C経路に整合している。



- ・オントラックといっても1.5°C経路の幅のギリギリ上位をかすっている程度で、世界全体で達成できない。

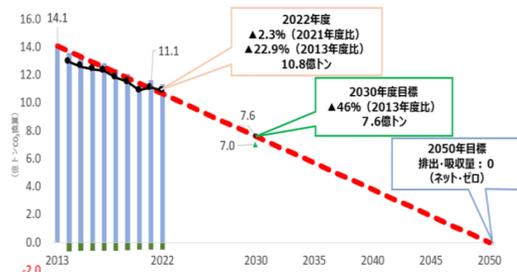
削減経路について

・他国と比較して日本だけがオントラックと言っているが、基準年が違う。EU諸国は1990年、北米は2005年。日本だけ2013年に基準年をずらした。

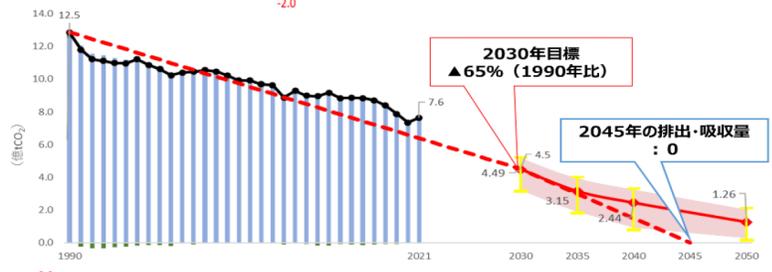
・歴史的排出の多い工業国としての責任と対策できる能力が反映されていない。公平・公正の観点から非常に不十分。

G7メンバーの排出削減の進捗状況

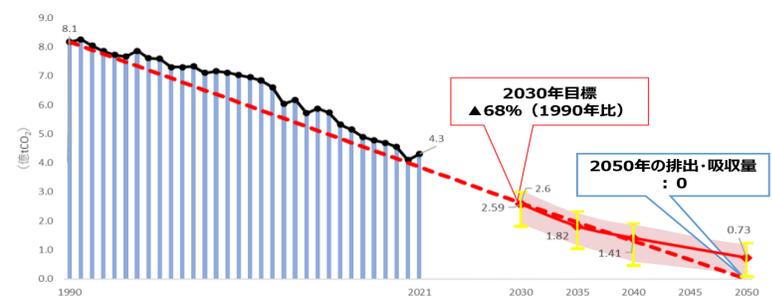
日本



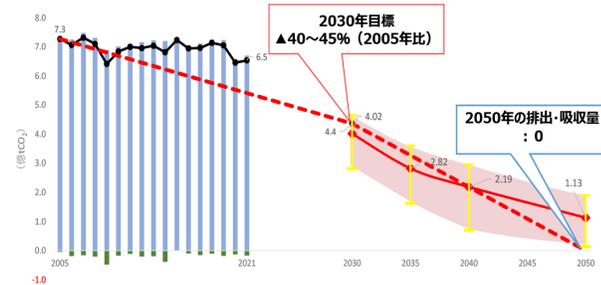
ドイツ



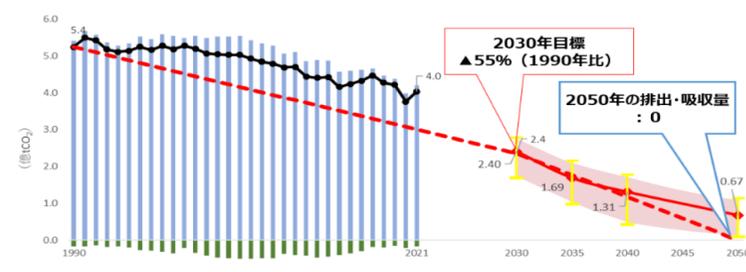
英国



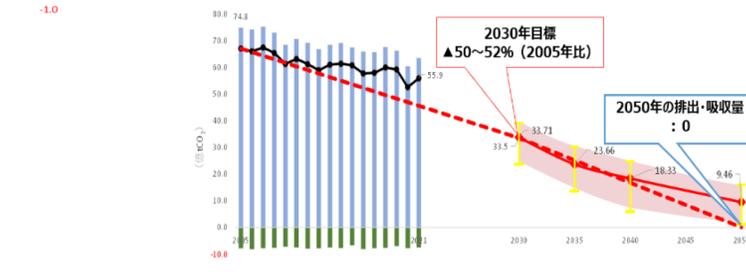
カナダ



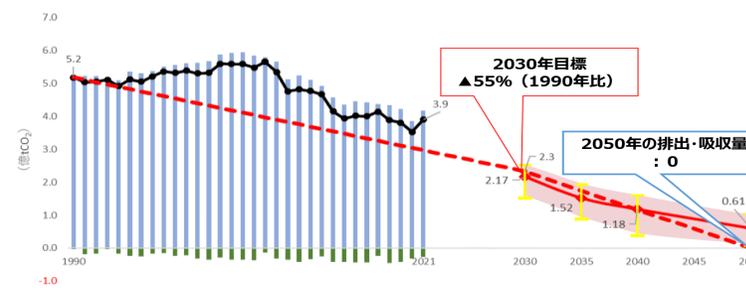
フランス



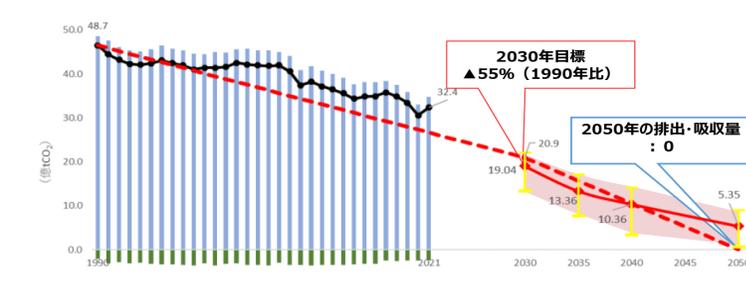
米国



イタリア



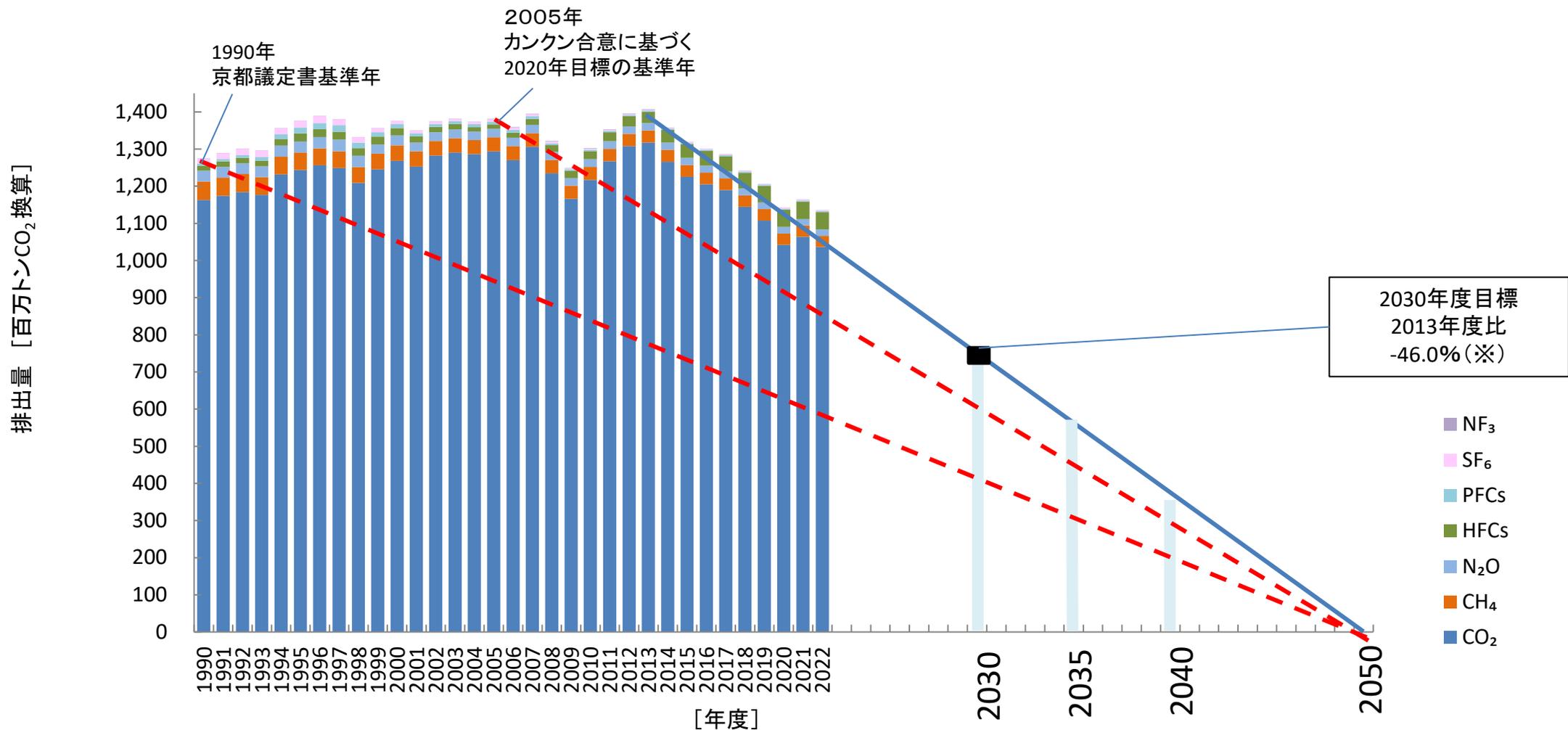
EU



■ 排出量 ■ 吸収量 ● 排出・吸収量 → IPCC報告書における1.5°Cに抑える経路

※グラフの左端の位置は基準年の違いを表している。

1990年以降の日本の排出推移

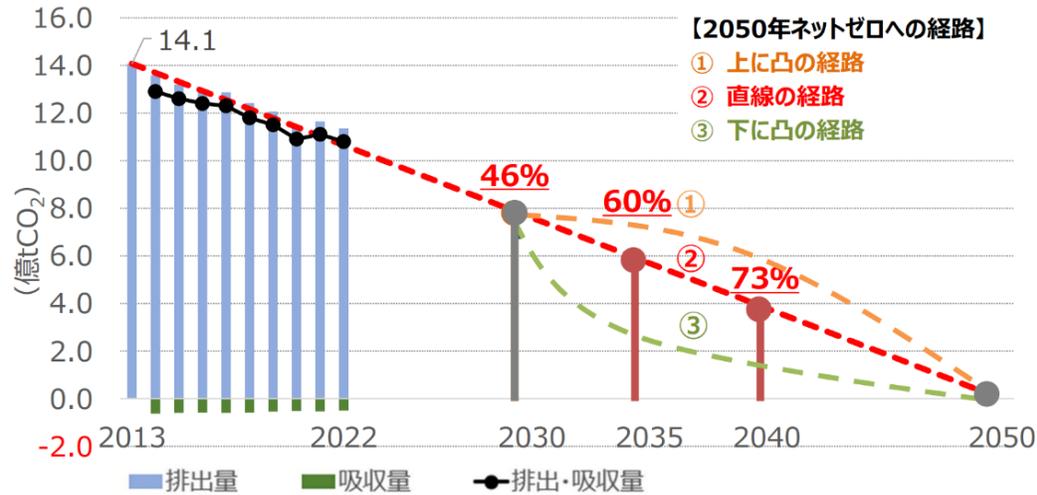


原案で示された3つの選択肢 ①と②はあり得ない

<政府案>

日本の排出削減の現状と次期NDC (Nationally Determined Contribution) 水準

2030年度46%削減、2050年ネットゼロを堅持。その間の経路が論点。



NDCについての代表的な見解

①上に凸の経路

- 技術の革新が生まれ、**排出削減が将来加速**することを踏まえると、上に凸といった考えもある。

②直線の経路

- 2050年ネットゼロと整合的な道筋**を示し続けることが、企業・社会にとって予見可能性を高める。

③下に凸の経路

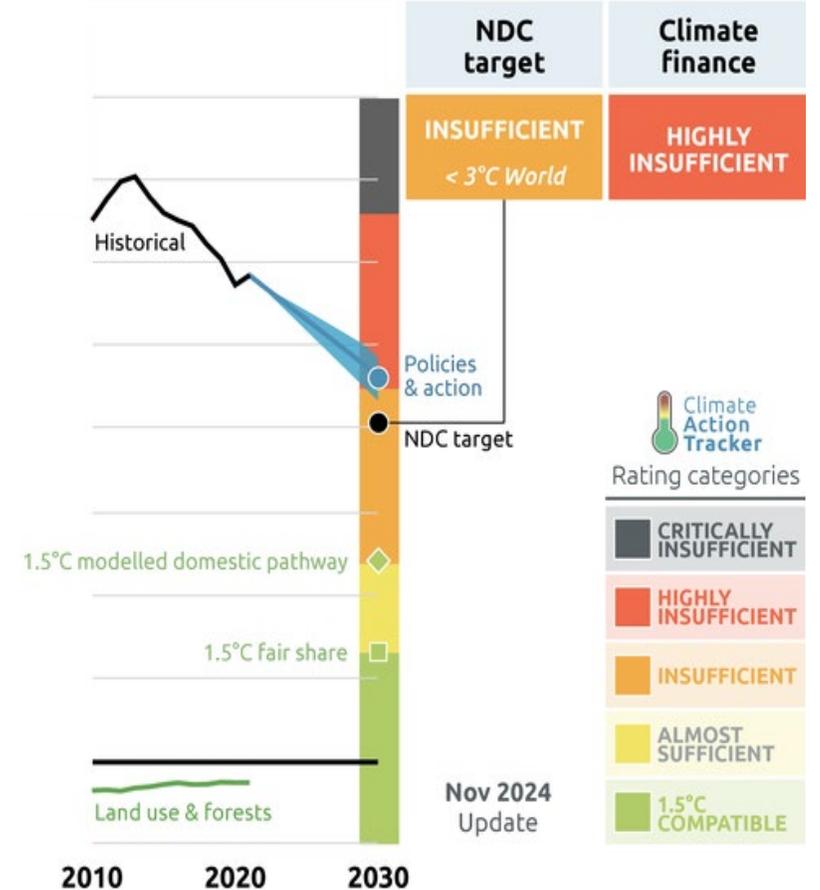
- 世界平均以上の目標**を掲げるという姿勢を示すことで、はじめて途上国が動く。

2030年度から先の削減目標、削減経路については、多様なご意見があったところ、**2050年ネットゼロ実現に向けた我が国の明確な経路**を示し、排出削減と経済成長の同時実現に向けた予見可能性を高める観点から、**直線的な経路を軸に検討を進めること**でどうか。

3

<NGO>

2030年目標も不十分→深掘りする必要



- 第6回合同会合事務局資料 https://www.env.go.jp/council/content/i_05/000274682.pdf

- Climate Action Tracker <https://climateactiontracker.org/countries/japan/>

パブコメのポイント

- IPCC AR6で示された1.5°Cの排出経路を世界全体で達成するために、日本は排出大国としての責任の観点から2035年80%削減を目指すべきである。
- IPCCが示す1.5°Cに必要なGHG削減率 2035年60%削減は基準年が2019年比で示されたもので、2013年比では67%削減に相当する。
- 2013年比で直線的な経路では非常に不十分であり、世界全体の公平・公正の観点から2030年目標も含めて見直し、2030年に60%削減、2035年に80%削減を目指す。
- 目標達成のためには、特に日本の温室効果ガスの排出量の3～4割を占める電力セクターにおいて、大幅削減を実現し、原発・石炭火力から脱却し、再エネを普及することが鍵を握る。

温室効果ガス削減水準

IPCCが示す1.5°Cに必要なGHG削減率と経産省・環境省案

	IPCC AR6 統合報告書 1.5°C (>50%) に必要なGHG削減率		11月25日合同審議会 経産省・環境省案	
	2019年比	2013年比	2013年比	2019年比
基準年				
2030年目標	43%	53%	46%	39%
2035年目標	60%	67%	60%	52%
2040年目標	69%	74%	73%	67%

気候ネットワーク <https://kikonet.org/content/37006>

2-1. 将来の気候変動

継続的な温室効果ガス排出により更なる温暖化が進行

- 継続的な温室効果ガスの排出は更なる地球温暖化をもたらし、考慮されたシナリオ及びモデル化された経路において最良推定値が短期のうちに1.5℃に到達する。
 - 大幅で急速かつ持続的な温室効果ガスの排出削減は、約20年以内に地球温暖化の識別可能な減速をもたらし、数年以内に大気組成に識別可能な変化をもたらすだろう（確信度が高い）。
- (AR6 SYR SPM B.1)

モデル化された全球排出経路の主な特徴

分類		GHG排出量 (2019年比削減率)		実質ゼロ達成年 (正味ゼロとなる経路の確率)		50%確率における世界の平均気温上昇温度		気温上昇ピークが規定内に収まり続ける見込み			
		シナリオ	確率	2030	2050	CO ₂ 実質ゼロ	GHG実質ゼロ	ピーク時	2100年	<1.5℃	<2℃
C1	2100年1.5℃まで低いオーバーシュート	50%	43% [34~60%]	84% [73~98%]	2050~2055 [100%]	2095~2100 [52%]	1.6℃ [1.4~1.6℃]	1.3℃ [1.1~1.5℃]	38% [33~58%]	90% [86~97%]	100% [99~100%]
C2	2100年1.5℃まで低いオーバーシュート	50%	23% [0~44%]	75% [62~91%]	2055~2060 [100%]	2070~2075 [87%]	1.7℃ [1.5~1.8℃]	1.4℃ [1.2~1.5℃]	24% [15~42%]	82% [71~93%]	100% [99~100%]
C3	2100年2℃まで	67%	21% [1~42%]	64% [53~77%]	2070~2075 [93%]	到達しない [30%]	1.7℃ [1.6~1.8℃]	1.6℃ [1.5~1.8℃]	20% [13~41%]	76% [68~91%]	99% [98~100%]
C3b	2030年までNDCの延長で2100年2℃まで	67%	5% [0~14%]	68% [56~83%]	2065~2070 [97%]	到達しない [41%]	1.8℃ [1.6~1.8℃]	1.6℃ [1.5~1.7℃]	17% [12~35%]	73% [67~77%]	99% [98~99%]
C4	2100年2℃まで	50%	10% [0~27%]	49% [35~65%]	2080~2085 [86%]	到達しない [31%]	1.9℃ [1.7~2.0℃]	1.8℃ [1.5~2.0℃]	11% [7~22%]	59% [50~77%]	98% [95~98%]
C5	2100年2.5℃まで	50%	6% [-1~18%]	29% [11~48%]	到達しない [41%]	到達しない [12%]	2.2℃ [1.9~2.5℃]	2.1℃ [1.9~2.5℃]	4% [0~10%]	37% [18~59%]	91% [83~98%]
C6	2100年3℃まで	50%	2% [-10~11%]	5% [-2~18%]	可能性がない	可能性がない	2100年前にピークに到達しない	2.7℃ [2.4~2.9℃]	0% [0~0%]	8% [2~18%]	71% [53~88%]

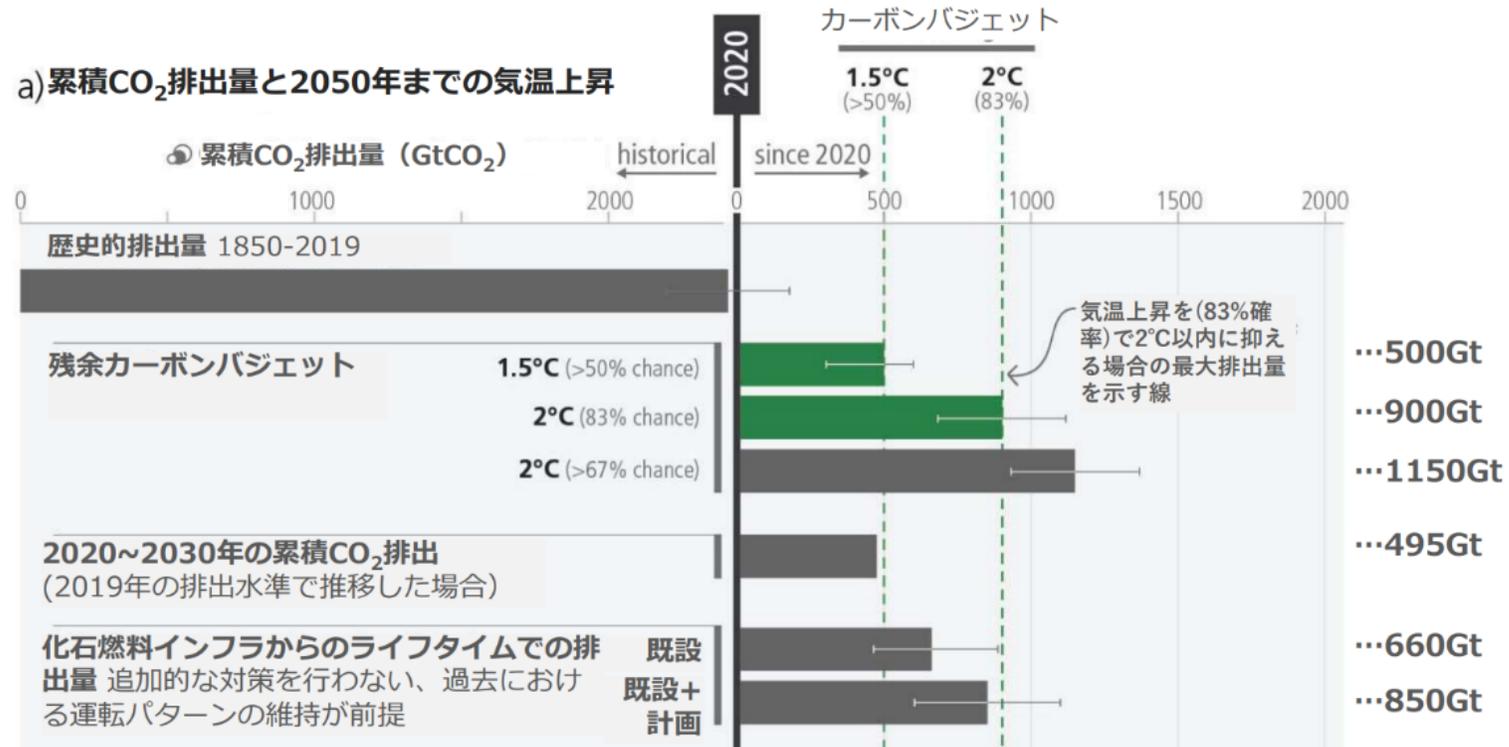
環境省 注: 数値は中央値。括弧内は5~95%確率の値

出所: AR6 SYR 本編表3.1より作成

2-5. カーボンバジェットと正味ゼロの排出量

1.5°C/2°Cに残されたCO₂排出量は500Gt/1150Gt

- 追加的な削減対策を講じていない既存の化石燃料インフラに由来するCO₂排出量は1.5°C(50%)の残余カーボンバジェットを超えると予測される(確信度が高い)。 (AR6 SYR SPM B.5)
- 2020年の初めからの残余カーボンバジェットの最良推定値は、50%の確率で温暖化を1.5°Cに抑える場合に500GtCO₂であり、67%の確率で温暖化を2°Cに抑える場合は1150 GtCO₂である。 (AR6 SYR SPM B.5.2)



出典: AR6 SYR 本編図3.5 a)